

虎と龍とときどき私

「「我が社にようことそ」」

「むく」

「音夢や、なんでそんなに嫌そうな顔してるわけ？」

「だって、また虎先輩たちと一緒にじゃないですか」

「僕も虎もまた音夢と一緒に働けて嬉しいよ。はい、今日のお弁当

「有難うございます。龍先輩。きょうの料理は何かな」

「うん、オニギリとスープとハンバーグとか色々入れてるよ。しつかり食べてね」

「龍先輩には高校生の時からお世話をなつてます」

音夢が嬉しそうに話すと虎が頭にチヨップをする。

「ね～む、俺にあえて嬉しく無いのか？」

「微妙です」

「び、微妙！？なんで俺だけ微妙なわけ？」

「オカン属性の龍先輩は料理を食べさせてもらえるけど、無駄にイケメンなお二人ですよ。私が女子からいじめられます」

「イケメンなのは嬉しいけど、いじめられるんなら俺らにいえばいいじゃねーか」

「更にひどくなるし。そもそも彼氏でも無いのに言いませんよ。だから、近いので離れてください」

「音夢、そんな言い方したら虎が可哀想だよ。僕は近くに居れて様にずっと、餌付けしてたから、この通り懐かれたけど。虎は何もし

ていないでしょ？」

「つく！俺に料理する能力があれば」「虎が料理したら消し炭になっちゃうよ。そんなの食べさせられな
いさ」

二人が言い合っているなか、音夢はお弁当を食べると帰る支度をする。本日は研修だつた為昼で終わり。こここの会社は社員に優しく本日は皆昼上がりだつた。まだ、仕事らしいことをしていながら、終わつたのなら帰るだけ。

「じゃ、お疲れ様です」

「までまでまで！音夢なんで俺達を置いて帰ろうとするんだよ」「え？だつて、薄い本を買いに行かないと行けないので。今日販売日なんです」

「うすい、本？」

「虎多分、同人誌のことだと思う。内容はBLだね」

「びー、える。つまり、男と男がイチャイチャする感じの？」

「おそらくそうだね。音夢、僕は抵抗ないから一緒に着いていっていいかな？」

音夢は眉間に皺を寄せ、龍を睨むが爽やから笑顔でスルーされる。

「お、俺も行く！BLがなんだってんだ。俺だって問題ねえんだよ」

「ほほう。つまり、二人はBL本に興味があるのでですね。ふむふむ。読んだ事は有りますか？」

「「ない」」

「へへ、じゃあ、過激な行為のシユチュエーションでも大丈夫と」

「過激？」

「あ、虎、多分性行為の事じゃないかな。BL本も甘々から激し
目まで色々あるから」

「なるほど、別に気にしねえ」

二人はついて行く為に大丈夫だと言うと音夢は頷いて会社を出た。
二人はその後を追いかけて行く。

音夢は改めて二人を見る。金髪で少し長めの髪にピアスをしてい
る龍。黒髪で目が細くどちらかと言えばヤンキーに近そうな虎。そ
んな二人は高校時代ヤンキーをしていた。しかし、ある日声をかけ
られた時に、イラついている音夢が強めに言い返すと何故かそれ以
来気に入られた。どうやら度胸の座った女性がお互いに好みだつた
らしい。一つ上の先輩だつた為卒業したら離れるかと思いきや、大

学まで一緒、そして、職場まで一緒になつていた。

「二人とも遅い。本が売り切れます」

「音夢つて、運動してないのに足速いよな」

「オタク魂が凄まじいのだろうね」

ここそこと話している虎&龍。しかし、そんな事はどうでも良く、ほつたらかしにして急ぐ音夢。本日買いに行くBL本は同人誌の中でも人気の本なのである。今回を逃したら買うことができないかもしけない。その気持ちが、急がせる。

「ついた！えっと、ここ奥にある新刊。：：有りましたー！3冊

「は？同じの3冊買うのか？」

「虎先輩、これは保存用、観賞用、読み倒し用として買うものなのですよ」

「…そうなのか？なあ、龍そう言うもんか？」

「ううん、僕もそれはちょっと分からぬ」

「ゲットしたので物色してきます。掘り出し物が見つかるかもです」

「俺も行くぞ」

「虎先輩が来ると目立ちます。それともおすすめの本があるので

か？」

「…、ない」

「じゃあ、待つてて下さい」

「はい」

落ち込みながら虎は近くにある本を手に取ると男性が二人並んで
る表紙を見て固まる。

「虎、俺達は免疫がないんだから、読んだら固まっちゃうよ。悪いとかそう言う次元じやなくて、驚いちやうよつて事」

「おう、そうだな。しかし、いろんな本があるんだな」

「だね、外で待つてる?」

「そうするか」

龍と虎は音夢に声をかけると外の入り口付近で待つていた。
30 分ほどしただろうか、大きな紙袋を持つてほくほく顔の音夢が帰つてきた。

「おう、おかえり!これから居酒屋行くか?」

「いえ、戦利品を読みたいので帰ります」

「まじか。俺達とご飯行こうぜ?な?」

「読みたいので無理です」

「音夢、お茶漬けの美味しい店があるんだけど、一緒に行かない？」

「行きます」

食べ物にも弱い、音夢は龍の声に頷いて、ついて行く。ポツンと置いてかれる虎は我に戻り慌てて後を追った。

「ここが、美味しいって言う評判の居酒屋だよ」

「お茶漬け3杯下さい」

「はいはい、虎はどうする？」

「俺刺身」

「僕も刺身にしようかな。じゃあタッチパネルを押して行くね」
龍がご飯の注文をしている時に、音夢は、本を一冊出し、読み出す。

「おまつ、ここで読むのか、いくらテーブル席でも周りがいるだろ」

「オタクが好きな時に好きな本を読んで何が悪いのです。続きが気になるので見ていいだけです」

虎がちらりと音夢の読んでいる本を見ると、激しめなシーンを日々と読んでいた。思わず顔を赤くする虎に平然とする音夢。

「音夢は昔からマイペースだよね」

「龍、これってマイペースって言えんのか？」

「まあ、マイペースだよね」

「つたく、ちつたあ俺達の事意識してくれても良くな？』

「それは、すぐには難しいんじやないかな。付き合い長いし」「はあ、いつになつたら男として見てくれるのかね」

「確かに」
二人の話を全く聞いてなかつた音夢は本に夢中になつて読んでいた。



◆

「お茶漬け美味しかつたです。ご馳走様です。龍先輩、虎先輩」「うん、気にしなくていいからね」「ご飯ぐらい俺がいくらでも奢つてやる」

「メッシ一君ゲット」

「メッシ一言うな。お前は全く」

虎が頭を小突くとにつこり笑つて音夢はお礼を言う。

「本当に有難う御座いました。楽しかつたです」

「そう言うところ反則だらうが」

「はは、僕ら振り回されてるよね。でもそれでいいと思つてるけ

ど

「それじやあ、送つてくださつて有難う御座いました。また明日会

いましょう」

「おう、いい夢みろよ」

「おやすみ、音夢」

「おやすみなさい」

返事をして、実家に入つて行く。高校卒業しても、大学生になつても実家が大好きな音夢は一人暮らしはしなかつた。それともう一つ夢のためでも有り、しなかつたと言うものもある。

「ママ、ただいま！」

「ねむ、おかえりなさい。ご飯は食べてきたんでしょ？」

「うん食べてきた。ねえママ、私、最近漫画が上手く描けないの。

少女漫画を描いているママはそんな時どうする？」

「ん？何言つてるの。貴女にはとつても良い先輩がいるじゃない。

取材させてもらつたら？」

「先輩？龍先輩と虎先輩？」

「そうそう、その二人を題材に書かせてもらつたらどうなの？」

「：いいかも」

「きっと良い作品ができるわよ」

「うん、聞いてくれて有難う」

音夢は部屋に戻り本を大事に片付けると、ベッドに横になる。漫画家として食べていきたい音夢はBLを主体に描いている。しかし、最近行き詰まっていた。

（先輩達のカツプリングどうしよう。虎×龍？それとも龍×虎？）

「どつちも悩む」

うとうとしながら寝る寸前までカツプリングを考えていた音夢だつた。



あれから、数日の時が経ち、音夢は二人を観察していた。経理部で一緒の龍。彼はスマートで仕事もできる。女性に人気で黄色い声がよく聞こえるほどだ。

(どうやつたら、二人の話考えられるかな)
悩んでいる音夢に、龍が話しかけてきた。

「どうしたの？ 眠たい？ 音夢、お昼までもう少し待つてね」

「うん、お腹すいた」

「はは、今日のお弁当は美味しいよ」

「うん、有難うございます」

(龍先輩はまめな感じ。虎先輩相手でもまめに対応するつて言う設

定にしたらどうかな)

一つ考えがまとまると、ニヤリと笑い、仕事に向き合う。

「お、やる気が出たみたいだね。えらいえらい」

「うん、やる気全開なのです」

「やっぱり、音夢は可愛いね。ずっと撫でてみたいぐらい」

「それはやめておきます。虎先輩にしてあげてください」

「なんで虎？」

「きっと、尻尾を振つて喜ぶと思うのです。うん絶対にあり」

「子供の頃から一緒にいるけど、僕が頭を撫でたら絶対に顔を青ざめると思うよ」

「いやいや、密かに喜んでいるに違いありません」

「うん～？？」

よく分からぬ発想に困惑する龍。仕事が残っていた為自分の席に戻る。しかし、音夢の考えがわからず、午前中仕事が手につかなかつた。

「ん〜、終わりました。ご飯の時間」

部署の人達は食事を食べに外へと向かい、今いるのは龍と音夢だけ。

「お〜す、昼行くぞ」

虎が笑顔で話しかけ、ドアを開ける。その虎を見た瞬間、音夢はニヤリと笑つた。

(龍先輩のお迎えをする虎先輩。やつぱりカップリングは龍×虎)

「あ、虎来たんだね。音夢もお弁当食べよう。何処で食べる？公園？食堂？」

「お、公園でも良いんじやね。もう春だから暖かいし、飯もうめえ時期だろ」

「そうだね。じゃあ、そうしようか。音夢、いいかな？」

「勿論大丈夫です」

（ふふ、幼馴染だから、息もぴつたり。どうやつて恋愛に発展するのだろう）

心の中で、考えながら二人の後をついて行く。会社を出て公園のベンチに座るとお弁当を渡された。

「今日は肉じゃが入れて見たんだよ。筍ご飯を炊いたんだ。音夢は好き？」

「筈大好きです」

「良かつた。音夢の喜んで欲しくて頑張つたんだよ」

「で、俺のはついでね」

「そうそう、虎のはついで」

「おま、あからさまにすんなよ」

「良いでしょ。これくらいしないと音夢は気づいてくれないんだから

ら

(ついでと言いつつ虎先輩のご飯を作る。これは怪しいタイミングです！)

目を光らせて二人を見ていた音夢を見て龍は嫌な感が走つた。
(もしかして、分かつてないか。それ以外のこと考えてる？)
目があつた音夢が微笑んで龍を見た為、彼は顔を赤めて俯いた。

(不意打ち、音夢の笑顔は心臓に悪い)

「筈うめえ、この時間音夢と一緒に飯食えて最高だよな。まあ、龍
もいるけど」

「それはこちらのセリフだよ。虎が邪魔しなければ、音夢と二人つきりなのに」

「それはさせね〜」

(なんだかんだ言いながら二人は意識し始める…うんうん、良い設定)

ニマニマと笑う音夢に虎は不思議そうにしながら話しかけた。

「今度泊まりの新人研修あるだろ？あれ、引率に俺が行くことにな
つた」

「僕も引率係だよ」

「ここでも息ぴつたりですね」

「あのな、俺は音夢と一緒に泊まりに行けて嬉しいだけだよ」

「僕もそうだよ。夜とか出かけちゃう?」

「龍さんや、引率者としてあるまじきセリフだな」

「虎さんこそ、一緒のお泊まりに喜ぶところが怪しいですけど」

「龍ほどあからさまじやねーよ」

「手段を選ばないだけだよ。手段なんて選んで自覚してもらえるなら既に付き合つてるよ」

「ほほう、俺を差し置いて付き合うとか絶対にゆるさねえ」

(他の人物が入るのが許せないのですね。二人の絆つて事です)

全く違うことを考えてニマニマしている音夢を見て虎は頭を傾け

た。

「なんか良いことあつたのか音夢？ニヤケ顔だぞ」

「ああ、なんかね今日ずっとそんな感じなんだよ。僕たちを見てニ

ヤニヤしてるんだよね」

「まさか、ついに俺たちの想いが伝わってにやけてるのか！？」

「いや、絶対に違う。あれは斜め方向に行つてる時だと思うよ」

「なんだよ。斜めつて、他に好きな男ができたつてことか？」

「いや、虎。それは観察してるけど、いる雰囲気じやないよ」

「龍、それじやあどう言う意味だよ」

「なんか嫌な予感がするんだよね」

「「はあ！」」

二人のやりとりに気づかず妄想をする音夢。ご飯はしつかりと全部食べるとメモ帳に何かを書き込みながらニマニマしていた。

◆

「あのメモ帳なんだ？」

「虎、あれはどうやらアイディア帳らしい」

「へー」

「全く何を考えているんだか」

結局二人は音夢の考えがわからずに戻が終わった。この日だけではなく、毎日のよう二マニマ音夢を目撃が情報が増えることとなる。その度に頭を悩ます、龍×虎だった。

なんだかんだで研修日初日を迎えることとなる。朝から夕方までオリエンテーションを受け、コミュニケーション障の音夢はやや疲れ気味だつた。

「お風呂、こっちです？」

やつと終わつた研修一日目。ご飯を食べて、お風呂に入る準備をして、中に入つた。脱衣室は誰もおらず、お風呂場にタオルで裸を隠して向かうと、虎と龍の二人が温泉に入つており目があつた。

「え？ 先輩達女性湯で何をしてるんですか？」

「音夢ーー！ 前、見えてるからちゃんと隠せ！」

「虎先輩痴漢ですか？」

「いいから、早く隠せ！」

「はは、眼福だね。なんならタオル外しても良いんだよ音夢」

虎が龍の頭を叩くと、音夢はなんとなくお風呂の中に入つてきた。

「おまつ、なんで入ってきたんだよ！」

「虎先輩、寒かつたので入りました。あ、タオル、温泉につけたら
ダメですよね。外さないと」

「ば、バカ。外すな。音夢、絶対に外すなよ」

「とーら、焦りすぎだよ。音夢僕が抱きしめて隠してあげようか

？」

「それより、なんで女湯に居るんですか？」

「ここはね、男湯だよ。音夢が間違ったみたいだね」

「私でしたか？。龍先輩」

「なに？お兄さんに抱きつきたくなつた？」

「音夢は龍の体を触り、ポツリと呟く。

「綺麗な体ですね。触つても良いですか？」

「もう触つてるけどね。勿論良いよ」

「おいつて！」

「嫉妬しないで虎。さあ、さわつていいよ音夢」

手を動かしてゆつくり触ると、ゴツゴツした感触。音夢が触つた

筋肉がピクピク動く。

「音夢、気持ちいい。もつと触つて」

「…先輩つて男性なんですね」

「そうだよ。虎だつて男性。そして、音夢は女性」

「私と全然違う」

「音夢…、君は女性なんだ。ほら、お腹を触るよ。ここから上にも下へも触る事ができる。女性の大事な部分であり、反応する部分でもある」

「…うん」

「ねえ、音夢。俺と虎で触つてもいいかい？このお尻みたいに胸や下を触りたい」

「わたし、…なんか、湯渡ました」

「ええ！？湯渡！？大丈夫なの？」

慌てた龍と虎は音夢を抱きしめて急いで脱衣室に向かつた。そして、椅子の上に寝かせると近くにあつた団扇で仰ぐ。

「つたく、龍、攻めすぎるなよ」

「虎、分かつてるけど我慢できなかつたんだ。音夢の裸を見て、気分が高揚した」

「まあ、俺もだけど。けど、急ぎすぎるな。ゆつくりでいいんだよ」

「分かつたよ。仕方ないね。他に取られたくなかったからつい欲が出たんだ」

「まあ、龍ばつかり攻めれないわな。俺も音夢の噂聞くんだよ。可愛い新人が入ってきたって。男性職員がよく騒いでやがる。しめてやろうかって思つてしまふぜ」

「その気持ちよくわかるよ。同じ部署でも感じるんだから」

二人は苦笑いをすると音夢に浴衣を着せて部屋に連れて行く。たまたま一人部屋だつた為騒ぎになることはなかつた。

「起きるかな？」

「起きるまでそばにいるか。龍、手を出すなよ？」

「分かつて いるよ」

二人が話しているとや音夢はゆつくり目を覚ました。ぼーっとす

るなか、体を起こし、ふらつく体を虎が抱き止めた。

「大丈夫か？」

「うん、平氣です。お風呂場では間違つてごめんなさい」「かまわねえよ。それより、水いるか？」

「いる」

「口移しで飲ませてやろうか？」

「それは、龍先輩にしてあげてください」

「…ん？ なんで龍？」

「いえ、なんでもないです」

「はい、お水だよ音夢」

「有難うございます。龍先輩」

龍にお礼を言うとペットボトルを持つて水をグビグビ飲む。熱つ

ていた体も少しづつよくなつた。

「今日はごめんね、セクハラしちやつた」

「龍先輩がお尻を触った事ですか？」

「そう、柔らかくて気持ちよかつたよ」

「でも、別に気にしてないです」

「そうなの？」

「龍先輩は両方いけうなので、生理的に欲情したのかなと思いま
した」

「生理的ね」

「違いましたか」

「はあ～、うちのお姫様は自覚するのにどれだけ時間がかかるのか

⋮

「自覚??」

「まあ、今日は引いてあげる。体調が大丈夫なら俺たちは部屋に戻るよ」

「はい、大丈夫です」

「音夢、言つておくけど、引くのは今回だけだよ。次は無理してでも分からせる」

「よく分からないですけど、気をつけます」

「うん、そうだね。気をつけないと食べちゃうからね」

「はい、すいません」

「じゃあ、虎一緒に帰ろう」

「俺が抜け駆けしないようにか?」

「勿論そうだよ」

(二人は両思い)

二人が聞いたら猛烈に怒りそうな事を考えながら、ぼーっとする音夢は夢の中にいた。



研修2日目。本日は講習を受けていた。その中には龍や虎が講習をすることがあつた。他の女子生徒は黄色い声援をおくり、二人は一気に噂の人になつた。

(ああ、二人が近くにいるとまた、いじめられちゃいます。逃げよう)

今日はぼつちをを目指して、隠れながら講習室を離れると何故か二人が立っていた。

「お弁当買ってきたよ。一緒に食べよう」

「龍先輩、今日は一人で食べたいです」

「ダメだよ。絶対にダメ」

「なんでですか！？たまには他の方と食べた方が良くないですか？」

？

「は？何言つてるの？昨日の今日で、なんでそんな話になるの？」珍しく怒つている龍に、音夢は肩をびくつかせた。

「龍先輩、えつと、他の女性と食べないのでですか？」

「あのね、音夢がいいの。どう言う考え方でそうなるの？分からせようか？」

「龍、あんまキレるなって。音夢、俺たちを避けようとすると、龍は特に短気なんだからよ」

「避けてない、です」

「昨日の事気にしてんのか？」

「いえ全然」

「それはそれで、悲しいな」

「その女性社員から睨まれたくなくて、嫌だから避けてました」

「音夢、言つただろ。俺も龍も何かあれば助けてやるつて、だからさ、避けたりするな」

「でも、」

「頼むよ。俺ら音夢に避けられると結構ダメージ喰らうだよ。そしたら、暴走するかもしない。お前を誰にも見せねえよう何処かに隠すかもしれない。そんなことしたくないんだよ」

「分かりました。けど目立ちたくないのです」

「俺らそんなに目立つか？」

「だつてイケメンだから」

「イケメン…やっぱ、めっちゃ嬉しい。音夢にイケメンとか思われてたんだつて思つたらちよつと自信になるわ」

「ちよつと虎。勝手に喜んでないで。ぼくはまだおこつてるんだよ

音夢

龍が話に割つて入つてくると、音夢はしょぼんとした顔をして、謝つた。

「御免なさい」

「仕方ないね、じゃあ、今日ご飯食べながら愛してるよゲームしてもいい?」

「愛してるよゲーム?」

「照れた方の負けってことだよ」

よく分からぬが、龍の提案に乗つて、お昼を公園で食べに行くことにした。

「さてと、愛してるよゲームを始めるよ」

「お願いします」

「音夢、出会ったあの日からずっと愛してたよ」

「そうなのですね」

「音夢のこと思うといつもドキドキする。眠れない日だつてあるん

だ

「不眠ですか？」

「音夢、愛してる。僕のものになつて欲しい」

（それは私に言わせてると見せかけて虎先輩に言つてるのかな？練習？）

「音夢が欲しい。他の女性なんか全く目に入らない。愛しいって思うのも、全て音夢なんだよ」

「ふむふむ」

「音夢…」

肩を持つて引つ張ると倒れる音夢を押し倒す。

「床ドンつて言うんだよ。ねえ、唇が近いね、キスしちゃいそうだ

よ。食べててしまいたい」

(これを虎先輩にしたら)

思わず妄想の中で二人を浮かべて顔を赤くする音夢。

「顔赤いね、少しは意識してくれた?」

(虎先輩が意識しました)

「つておい、そこまでだ」

虎に止められて龍は渋々離れる。虎もゲームをするかと思いきや、
意外と律儀に音夢を起こす。

「音夢、ゆつくりでいいから俺らを男として見てくれ

「男としてですか?」

「そう、俺らはずつと、一途に音夢を思つてゐる」

何か言おうと思つたが真剣な虎の様子に音夢は何も言えなかつた。

お昼が終わる時間になり三人は講習に急いで戻ることにした。それから、午後の講習が始まり、あつという間に一日が終わる。一泊2日の研修は無事に終わることとなつた。



研修の日の出来事はなんだつたのか、いつも通りに過ごす三人。季節は夏に近づいていた。

「そろそろ、夏だし出かけねーか？ 音夢」「もう予定がありますので無理です」

「な！？おい、龍！抜け駆けは禁止だつて言つただろ！」

「僕じやないよ。むしろ僕の目を盗んだアホは何処のやつだろと思つてるよ」

苛立ちながら言う龍に虎は音夢を向いて話しかける。

「誰と出かけんだ？」

「一人です」

「一人？つてかそれなら、いつも通り俺らを連れて行けよ」

「じゃあ、条件として売り子になつてもらえるなら交渉成立です」
「う、売り子？おう、いいぞ」

「約束ですよ。龍先輩もいいですか？」

「勿論良いよ」

二人に許可をもらいニマニマ顔の音夢。なんだかんだで、約束し

ていた日になつた。広い会場に机があり、大量の本が置いてあるところに龍と虎は売り子さんとなる。

「なあ、この本はなんだ？」

「どうやら、音夢が書いた漫画らしいよ虎」

「この本つて、」

薄い本をペラペラと開きながら中を見ると何故か見たことがある

シーンと、登場人物。

「この本BLだよな？」

「そうだね虎」

「この本の二人つて俺たちだよな？」

「そうだね虎」

「まさか、今までのことつて脳内変換されていたのか？」

「どうやらニマニマしている音夢はこれを考えていたみたいだね」「マジか」

落ち込みを隠せない虎をみて龍もため息がついた。

「あの本ください」

いつの間にか始まっていたコミケに、龍と虎のブースは大量に人が並んでいた。

「ねえ、あのイケメン達本人よね」

「ぜつたいそうよ、やばいです」

女性達が売り子をしている龍と虎を見てこそこそと話していた。

「買い物してきました！うれてますか？」

「音夢、お前な、どんな脳内変換してんだよ」

「虎先輩、ネタ提供有難うございます」

「どうやら、しつかりと仕込まないといけないようだね」

「仕込む？」

「龍が怒りながら言う言葉に音夢が首を傾けるとそれが更に煽る。

「分かつた。これから、しつかりとたつぶりと愛してあげる」

「俺ももう止めねえ、覚悟しておけよ音夢」

「二人が怒っていると音夢が周りを見て人がいないことに確認して二人に言う。

「お願いします、付き合つてください」

「「は？」

「だから、セカンドパートナー制度を題材に描いてみたいですね。だから、仮で付き合つてください」

「題材、いや、この際、関係ない。意識してもらえるんなら喜んで

やるぜ」

虎が言うと龍も頷いた。セカンドパートナー制度とは重婚が認められた制度のことだ。最近少子化で建てられた制度だった。

「有難うございます」

「覚悟してろよ音夢」

「そうだよ、僕の愛は重いからね。仮から本物にしてあげるからね」

音夢は頷くとスマホを見て笑顔になる。

「冬コミケが当たりました！セカンドパートナー制度を頑張つて書くぞ」

音夢の大声が会場内に広がり、周りが振り返る。しかし本人は気づいていない。

「世話が焼けるな。隠してやるからこっち来い」
虎が言うと音夢は素直に近づき抱きしめられる。反対側から龍が抱きしめて結局目立つようになつてしまつた。



「鬼頭くん、懐かしいわね？音夢の高校以来かしら」「はい、お久しぶりです」「アシスタンント本当にいいの？」
「音夢にも会えますし仕事も好きなので大丈夫です」

「音夢つて意外とモテるのよね。これから一波乱になりそうね」

音夢の母が苦笑いをしながら、つぶやくのだつた。